

新たな役割を担う「内港地区」

稲永ふ頭



【港内位置図】

旧稲永ふ頭の展開

戦後名古屋港発展の一大拠点

稲永ふ頭は、戦後名古屋港の急成長を支えた一大貿易拠点です。

旧稲永ふ頭は、我が国港湾施設の荷役能力向上と近代化を目指した昭和 26 年閣議決定「主要港湾における荷役能力の緊急増加について」に基づき、神戸港の第 7 突堤、横浜港の高島 3 号栈橋などとともに我が国有数の近代的ふ頭として整備され、昭和 35 年に正式に供用開始しました。当時輸入品の代表であった綿花、羊毛の陸揚げはここに集約され、極度の船混み状態と滞貨といった問題解決に大いに貢献しました。

稲永第 2 ふ頭の建設

近代ふ頭の本格化

稲永第 2 ふ頭は、昭和 34 年に建設工事を開始し、昭和 41 年に供用を開始しました。輸出専門ふ頭として京浜港、名古屋港、阪神港に 20 バースを新設する国の構想に組み込まれたもので、北米向け貨物を専門に扱うふ頭として建設されました。背後には、かまぼこ型で内部に柱のない、当時としては画期的な上屋を建設し、フォークリフトなどの効率的な使用を可能にしました。

モーダルシフト推進の拠点

現在は RORO 船定期航路としても活躍

昭和 40 年代半ばからのコンテナ輸送への移行に伴い、稲永ふ頭で扱われる貨物の名古屋港全体に占める取扱比は減少し、その後、雑貨を中心とした内貿バースとして再開発が進められ、平成 10 年に旧稲永ふ頭、稲永第 2 ふ頭間の埋立てが完了し、二つの名称を「稲永ふ頭」に統一しました。現在は RORO 船の定期航路が利用するなど、モーダルシフト推進の拠点でもあります。

処分場の整備

廃棄物埋立護岸完成

稲永ふ頭の内側の海面に、この一部を囲い込む廃棄物埋立護岸が平成 27 年 3 月に完成しました。この護岸は、平成 24 年度に工事着手し、3 年後に竣工となりました。南側約 1.6ha は名古屋市の一般廃棄物最終処分場として利用され、15 年間の計画で埋め立てられる予定です。北側約 3.3ha は、名古屋港内で発生した浚渫土砂を受入れ、平成 30 年 10 月に埋立竣工しました。完了後は、緑地、港湾関連用地として利用される予定です。

RORO 船

船のランプウェイを利用して、貨物をトレーラーやフォークリフトなどで積み降ろしする RORO（ロールオン/ロールオフ）方式の貨物船。荷役の迅速化とともにモーダルシフトの受け皿としても注目されています。

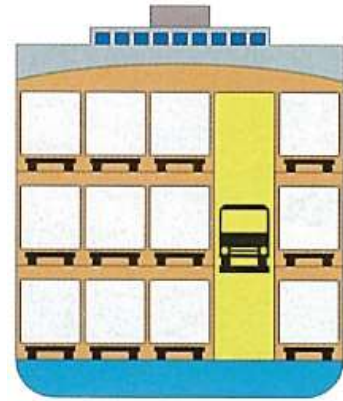
モーダルシフトとは、交通や輸送の手段を変えること。特に、貨物輸送をトラックから船や鉄道利用に変えることを指します。トラック輸送業界における労働力不足に対応するとともに、環境問題の面からもその広がりが期待されています。

エリア基本データ

ふ頭名称	稲永
旧名称	変わらず
臨港地区面積*	96.7ha
埋立完成時期*	昭和 10.11.9～令和 13(予定)

*稲永ふ頭と潮凧ふ頭を合わせて表記

バース水深	4～10m
-------	-------



RORO 船

公共岸壁（稲永ふ頭）

係留隻数 1,896隻

取扱量と品種

